

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720172

研究課題名(和文) 延辺朝鮮語の用言に関する音韻論的研究

研究課題名(英文) A Phonological Study on Verbal Stems of Yanbian Korean

研究代表者

伊藤 智ゆき (ITO, Chiyuki)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：20361735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、延辺朝鮮語動詞・形容詞のアクセントについて、母語話者7人から得られたデータに基づき、調査・分析を行った。中期朝鮮語(15-16世紀)の用言語幹は、活用アクセントパターンに基づき複数のアクセントクラスに分類され、そのアクセント分類は、語幹の音節構造と相関性があることが知られているが、本研究により、延辺朝鮮語の用言語幹にもそれに対応するクラス分類が原則として見られること、一部の例外や話者間のゆれは、中期朝鮮語以降に生じた様々な音変化のために、延辺朝鮮語における用言語幹の音節構造とアクセントクラスとの相関性が部分的に曖昧化したことに基づくことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the accent of verbal stems of the Yanbian dialect of Korean (north-eastern China), based on data obtained from seven native speakers. It has been reported by previous literature that monosyllabic verbal stems of Middle Korean (15-16th c., MK) were classified into several accent classes and the accent class distribution was strongly correlated to the segmental stem structure. In this study, we clarified that a similar accent classification is observed in Yanbian as well, while showing some irregular correspondences. We found out that these irregularities as well as synchronic variation in Yanbian are due to sound changes that occurred in Yanbian, which resulted in the merger of some segments. That is, the original association between accent class and segmental shape seen in MK became partially obscured, and in the face of these changes, Yanbian speakers have restructured the correlation between accent class and segmental shape.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：音韻論

キーワード：延辺朝鮮語 アクセント 中期朝鮮語 類推変化 歴史言語学

## 1. 研究開始当初の背景

筆者が本研究開始当初までに行ってきた研究は、主として朝鮮語の共時・通時音韻論に関するものである。共時音韻論的研究としては、借用語研究(日本語・朝鮮語借用語、英語・朝鮮語借用語、中国語・朝鮮語借用語等。Ito & Kenstowicz 2009a, 2009b, Ito, Kang & Kenstowicz 2006 他)、現代朝鮮語方言研究(伊藤 2009, Ito 2008a 他)、標準朝鮮語の音素配列に関する統計学的研究(Ito 2007)などがある。通時音韻論的研究としては、朝鮮語舌音末子音の歴史変化に関する研究(Ito 2010)、朝鮮語固有語・漢字語アクセントの歴史変化に関する研究(Ito 2008a, 2008b, 伊藤 2008)、朝鮮漢字音研究(伊藤 2007a, 2008 年第 36 回金田一京助博士記念賞受賞)、15-16 世紀中期朝鮮語アクセント・イントネーション研究(伊藤 2004, 2002b)、約 6,800 語の見出し語からなる中期朝鮮語アクセント辞典作成(2009-2011 年基盤研究(B)「朝鮮語史の国際的共同研究のための研究資源基盤構築」(東京外国語大学・伊藤英人)、2004-2005 年度若手研究(B)「中期朝鮮語アクセント辞典作成」による)、などがある。

近年は、2009-2011 年度若手研究(B)「延辺朝鮮語の音声学的・音韻論的研究」により、とりわけ中国吉林省延辺朝鮮族自治州で話される延辺朝鮮語を対象に、音声学的・音韻論的研究を進めてきた。同科研究費による研究では、名詞語幹(固有語・漢字語・借用語)を中心に記述・調査研究を行い、発話の録音及び語彙収集・アクセント調査を進めた。それにより、延辺朝鮮語子音・母音・アクセントの基礎的な音声学的特質(例:閉鎖音頭子音の VOT, F0, 語中における閉鎖時間, 単母音の F1, F2, F3, 各アクセント型のピッチ形とイントネーションの影響)とその世代差・性差・個人差について統計学的に分析し、他方言(標準朝鮮語・慶尚道方言)との違いを明らかにしただけでなく、様々な音韻論的研究を行った(借用語研究, アクセント変化の研究, 各語彙クラス(固有語・漢字語・借用語)におけるアクセントクラスの分布と音節量・音節構造との相関性に関する研究, 複合名詞に現れる濃音化の生起条件に関する研究等)。従って延辺朝鮮語の名詞語幹に関する調査・分析は十分に行ってきたと言える。

本研究は、研究開始当初まで行ってきた延辺朝鮮語の調査・研究を更に発展させ、名詞語幹と並んで主要な語彙クラスを成す用言(動詞・形容詞)を対象に研究を進めることにより、延辺朝鮮語の音韻論的記述研究を実質的に完成させることを目的とし、開始した。

## 2. 研究の目的

本研究は、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で話される延辺朝鮮語の用言(動詞・形容詞)

について徹底的な記述調査を行い、それによって(1)動詞・形容詞のアクセントを共時・通時音韻論的に分析すること、(2)バリエーション(世代差・延辺朝鮮語内の方言差・個人差)が生じる音韻論的要因を特定すること、の二点を目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 延辺朝鮮語語彙調査の実施: 延辺朝鮮語の動詞・形容詞(少なくとも 5 活用形)と、接尾辞のアクセントについて、複数の母語話者を対象に、調査・記述研究を行う。また、随時高性能リニア PCM レコーダーによる発話の録音(44.1 kHz, 16 bit の WAV ファイル)を行う。録音データは音声解析ソフトで分析する。更に、収集した語彙について、延辺朝鮮語話者自身による使用頻度のランク付け等、付加的情報の調査も実施する。

(2) 収集したデータの編集・組織化: 収集した語彙資料を、見出し語(ハングル表記・アルファベット転写表記), IPA による音声表記, 意味(日本語・英語), アクセント, 使用頻度, 注釈(調査に際し気付いた点など)が一覧できる、辞書形式の資料にまとめる。

(3) 延辺朝鮮語動詞・形容詞アクセントのクラス分類: 15-16 世紀中期朝鮮語の動詞・形容詞語幹は、活用アクセントパターンに基づき複数のアクセントクラスに分類され、またその分類は語幹の音節構造と強い相関性があることが知られている(Ramsey 2001)。延辺朝鮮語動詞・形容詞の 5 活用形を調査することにより、延辺朝鮮語にもそれに対応するクラス分類が見られるか、確認を行う。

(4) 延辺朝鮮語動詞・形容詞アクセントの通時・共時音韻論的研究: 調査・分類した延辺朝鮮語動詞・形容詞のアクセントクラスについて、中期朝鮮語動詞・形容詞のアクセントクラスと比較を行い、延辺朝鮮語動詞・形容詞のアクセントがどのような歴史的発展を遂げてきたのか、音韻論的に分析する。また例外と見られるパターンについて、各語幹もしくは活用形の使用頻度(token-frequency)や、活用クラス・音節構造の相対的頻度(type-frequency)との相関性を、統計学的に検証する。また、特定の活用形を基本形にして、類推変化が生じているか、可能な類推変化のパターンと不可能なパターンとの間に、どのような違いがあるか等についても明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) 延辺朝鮮語語彙調査の実施: 延辺朝鮮語動詞・形容詞の 5~7 活用形と接尾辞に現れ

るアクセントについて、延辺朝鮮語母語話者を対象に、調査を実施した。各調査項目について、異形態が存在するかどうかを逐一確認し、様々なバリエーションの情報を取得した。調査内容の一部については、高性能リニア PCM レコーダーにより、録音(44.1 kHz, 16 bit の WAV ファイル)を行った。また、収集した語彙のうち、1 音節語幹について、延辺朝鮮語話者を対象に、使用頻度の情報を収集した(各語幹の使用頻度を 1~7 までにランク付けした情報を収集した)。

(2) 録音データの音響音声学的分析：録音したデータについて、音声解析ソフト(Praat, Boersma & Weenink 2013)による分析を進めた。具体的には、調査済みの語彙についてアクセントパターンを再確認するとともに、イントネーションやフォーカスの影響、文中の位置における様々な実現形に関して、考察を進めた。

(3) 収集したデータの組織化：収集した語彙資料を見出し語、IPA 表記、意味、延辺アクセント、使用頻度、中期朝鮮語アクセント、注釈が一覧できる、辞書形式の資料にまとめた。統計学的分析を容易にするため、各音韻論的要素(中期朝鮮語アクセント、使用頻度、頭子音、末子音等)とアクセントクラスとの間の相関関係が抽出しやすい形式のファイルとして作成した。

(4) 延辺朝鮮語動詞・形容詞アクセントのクラス分類：中期朝鮮語の動詞・形容詞語幹は、活用アクセントパターンに基づき複数のアクセントクラスに分類され、またそのアクセント分類は、語幹の音節構造と強い相関性があることが知られている。本研究では、まず 30 種以上の中期朝鮮語資料を精査し、500 語程度について、各動詞・形容詞語幹のアクセントクラスを特定した。その上で、延辺朝鮮語の動詞・形容詞語幹にもそれに対応するクラス分類が見られることを、(1) で述べた調査資料に基づき、明らかにした。更に、中期朝鮮語との対応についていうと、80%程度は規則的なパターンで現れるものの、20%の語は何らかの変容を示していることを見いだした。

(5) 延辺朝鮮語動詞・形容詞アクセントの通時・共時音韻論的研究：延辺朝鮮語動詞・形容詞アクセントに見られる、中期朝鮮語との対応における例外や、延辺朝鮮語話者間に見られる共時的なゆれは、中期朝鮮語以降に生じた様々な音変化(複数の音素の合流)、及びアクセント体系の変化のために、延辺朝鮮語における用言語幹の音節構造とアクセントクラスとの相関性が、部分的に曖昧化したことに基づくことを明らかにした。即ち、延辺朝鮮語用言アクセントにおける不規則な対応や共時的なゆれは、この新しい相関関係

に適應するよう、再構成されたものと言える。一方、分節音に見られるゆれとは異なり、延辺朝鮮語用言アクセントにおいては、特定の活用形にのみ基づく類推変化は明確には確認されないこと、また(1)で収集した使用頻度データと規則的対応との間にも相関性が見られないことを見いだした。更に、アクセントの類推変化は、用言語幹の音節構造 - アクセントクラスの相関関係から外れる方向には原則として生じないことを明らかにした。また、延辺朝鮮語に実在しない架空の動詞語幹を母語話者に発音してもらい、そのアクセントパターンについて観察した。話者は全体として、実在する語幹に現れる、音節構造 - アクセントクラスの相関性に沿ったアクセントで発音する傾向が見られるものの、語幹の構造に拘わらず、各活用形において主要な音調パターンで発音する傾向も同時に現れた。本研究では、このような延辺朝鮮語用言アクセントの歴史的発展と共時的なゆれについて、重み付け制約(weighted constraints)を用いて分析を行った。また、語幹の音節構造とアクセントクラスとの相関性について、対数線型モデルにより統計学的に検証した。延辺朝鮮語に限らず、朝鮮語諸方言における動詞・形容詞アクセントの歴史的発展、共時的バリエーションについての研究は、本研究が最初のものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

Do, Young Ah, Chiyuki Ito and Michael Kenstowicz. (to appear). Accent Classes in South Kyengsang Korean: Lexical Drift, Novel Words, and Loanwords. *Lingua*.

Ito, Chiyuki and Michael Kenstowicz. (to appear). The Adaptation of Contemporary Japanese Loanwords in Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 22.

Ito, Chiyuki. (2014). The Accent of Sino-Korean Words in South Kyengsang Korean. *Gengo Kenkyu* 145: 61-96.

Ito, Chiyuki. (2014). Loanword Accentuation in Yanbian Korean: A Weighted-Constraints Analysis. *Natural Language & Linguistic Theory* 32: 537-592. DOI 10.1007/s11049-013-9211-y

Ito, Chiyuki. (2013). Korean Accent: Internal Reconstruction and Historical Development. *Korean Linguistics* 15:2: 129-198. DOI 10.1075/kl.15.2.01ito

〔学会発表〕(計 5 件)

Ito, Chiyuki. Analogical Change of Verbal Stem Accent in Yanbian Korean. The 15th [2013] Harvard-ISOKL, 2013 年 8 月 3-4 日, ハーバード大学.

Ito, Chiyuki. Analogical Change in Progress: Accent Shift in Yanbian Korean. International Conference on Phonetics and Phonology 2013 (ICPP 2013), 2013 年 1 月 25-27 日, 国立国語研究所.

Kenstowicz, Michael and Chiyuki Ito. The Adaptation of Contemporary Japanese Loanwords into Korean. The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference, 2012 年 10 月 12-14 日, 国立国語研究所.

Ito, Chiyuki. Accentual System of Middle Korean and Contemporary Korean Dialects. 「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」研究発表会(代表: John Whitman), 2012 年 8 月 7 日, 国立国語研究所.

Ito, Chiyuki. Syllable Contact Phenomena in Yanbian Korean. 日本音韻論学会 2012 年度春期研究発表会, 2012 年 6 月 15 日, 首都大学東京.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.chiyukit.sakura.ne.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊藤 智ゆき (ITO Chiyuki)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号: 20361735